# \*海老名 - 植村のキリスト論論争\*\*\*

これは、2005年度の京都大学キリスト教学で「海老名 - 植村キリスト論論争」を取り上げて行った演習のまとめである。海老名などからの引用は、一部現代語表記に直して行った。

#### < 内容 >

- A. 論争のプロセス
- B. 論争の内容
- C. 土肥昭夫「海老名弾正と植村正久の神学論争」
- D. 研究文献

# A. 論争のプロセス

『植村正久と其の時代』五、243-333頁、『基督論集 - 海老名氏の基督論及び諸家の批判文』 警醒社書店、1902年、83-180頁

#### (1)背景

日本福音同盟会(1878/日本基督教信徒大親睦会、1885/日本基督教徒同盟会)の大挙伝道(19 01-1902)

植村正久「福音同盟会と大挙伝道」(1901.9.11『福音新報』324号)

### (2)論争1

海老名弾正「福音新報記者に與ふるの書」(1901.10.1 『新人』第二巻第三号) 植村正久「海老名弾正君に答ふ」(1901.10.9 『福音新報』328号) 海老名弾正「植村氏の答書を読む」(1901.11.1 『新人』第二巻第四号) 植村正久「挑戦者の逃亡」(1901.11.6 『福音新報』332号)

#### (3)論争2

海老名弾正「再ひ福音新報記者に與ふ」(1901.12.1 『新人』第二巻第五号) 植村正久「海老名弾正氏の説を読む」(1901.12.11 『福音新報』337号)

# (4)海老名弾正の三位一体論

海老名弾正「三位一体の教義と予が宗教的意識」(1902.1.1 『新人』第二巻第六号) 植村正久「基督と其の事業」(1902.1.29-7.24 『福音新報』)

### (5)論争とその波及

福音新報社説「海老名弾正氏の告白を紹介す」(1902.1.8『福音新報』341号) 新人社説「福音新報の紹介文を読む」(1902.2.1『新人』第二巻第七号) 福音新報社説「彼我相違の点を明らかにす」(1902.1.15『福音新報』342号) 三並良「基督に関する論争を読む」(1902.2.1『新人』第二巻第七号) 三並良「福音新報記者の基督論」(1902.3.1 『新人』 第二巻第八号)

小崎弘道「海老名弾正氏の三位一体論を読む」(1902.1.7-2.7 『東京毎週新誌』960-963号) アルブレクト「基督教的意識と神に関する三位一体の教義」

(1902.2.21-3.7 『東京毎週新誌』965-967号)

高木壬太郎「海老名弾正氏の三位一体論」(1902.1.18-3.22『護教』547-556)

海老名弾正「諸批判を読んで再び予が基督観を明にす」(1902.4.1 『新人』第二巻第九号)

『基督教本義』(日高有隣堂、1903年)

# <u>B.論争の内容</u>

#### (1)背景

日本福音同盟会(1878/日本基督教信徒大親睦会、1885 / 日本基督教徒同盟会) の大挙伝道(1901-1902)

植村正久「福音同盟会と大挙伝道」(1901.9.11『福音新報』324号)

福音同盟会という多様な信仰を有する諸教派の親睦団体が掲げる「福音主義」は曖昧な内容のものであり・海老名と福音同盟会との関係も矛盾している・、現状の福音同盟会が伝道の主体であることは困難である。 植村が伝道をともにしうるとする信仰内容の一致について(植村の信仰内容)。

### (2)論争1

1. 海老名弾正「福音新報記者に與ふるの書」(1901.10.1 『新人』第二巻第三号)

植村の信仰内容(「神、人となり」「世に下り」)について論争を挑む。

三位一体の三つのペルソナの関係について、哲学的あるいは論理的にいかに考え説明 するのかという論点。神話論的語り方を字義通り信仰するのかという論点。

古代から論争されてきた点を、近代主義的立場から再度問題提起した。

伝統的信仰内容と合理精神との関わり

2. 植村正久「海老名弾正君に答ふ」(1901.10.9 『福音新報』328号)

論争に閉口すると言いつつも、論争を有利に進めることを念頭に言葉を選んでいる。自らの信仰は「歴史的の信仰」「基督教徒の歴史的に継承し来れる信仰」であって、その論理的哲学的な問題はすでに十分議論を経たもの(御質問は無用)である。

キリストは人となりし神であり、礼拝と祈祷の対象。「今更の様に難題がましく御質問あるが了解致し兼ね候」、むしろ「無信の哲学生」のような口ぶりに対しては、「不審なるは貴殿の立場にて候」。

3. 海老名弾正「植村氏の答書を読む」(1901.11.1 『新人』第二巻第四号)

植村が海老名の質問に直接答えないのに対して、まず非難する。

キリスト教史から見て、「単に歴史的に継承し来たれる信仰という言葉を以て一概に言い去ることは出来まい」「彼の欧州の宗教改革といひ、諸教派の分立勃興といひ、見来ればこれ基督教信仰内容の発展に他ならない」

「恰も洗礼志願者の入会試験でもしらるるが如き口調」「「歴史的に継承せる信仰」の法位」「討究や論戦で以て真理を発揮することは到底植村氏は臨まれないやうに思われる。」「霊界の

宣戦を現出するには至られまい。」「自称正統派の取りたる態度」「若し我国の固陋なる忠君愛国の唱道者に、其忠君愛国の内容如何と問ふたならばドーだろう。不忠不敬の宣告は直に其口から下されるであろう。今日の宗教界また比類の人に乏しくない。」「予は同氏に其信仰の表白を請求したのではない。其仰々しく発表せられたる信条の内容を聞かんが為に質疑を発したのである。之を主張するを以て其主義とする所の植村氏は其内容の質問に答ふる義務はないのであるうか。氏が一言を以て之れに及ぶものなくして却つて予に信仰の表白を勧告せらるるは、氏の其信条を主張せらるるやただの独断的であるとの意味であるか。ああ予は最早多くをいふまい、しかも遂に此等意外の言を以て今回の局を結ばねばならぬに至つたことを深く限りなく遺憾とするものである。」

#### どこに論争の土俵を設定するのかという問題

海老名は近代聖書学の水準での批判的討論を要求し、植村は伝統的信仰との連続性・ 継承の仕方という点での討論を求める。しかし、両者共に、必ずしも純粋にそれぞれの議論 を徹底せずに、問題を残している。もっと左からの、もっと右からの批判はどちらに対しても 可能である。

#### 無神論·懐疑論

/ 三並良/海老名弾正/高木壬太郎/アルブレクト、小崎弘道、植村正久/ 保守的正統主義・原理主義

### 4. 植村正久「挑戦者の逃亡」(1901. 11.6 『福音新報』332号)

「左しも勢威猛〈進み出でられたる海老名弾正は、植村氏の逆か寄せに逢ひ、旗を巻きて退却せられたり」「其の退却に至るまでの顛末を叙して」

「植村氏は唯だ敵の擬勢を張りたるに相當なる答えを與へしのみならず、真理を明らかにするの機会なりと見て取りしかば、此の方より短兵接戦するの目的を以て、彼の牙営を衝き、信仰上の異主義相見えて、直ちに其の黒白を明らかにせんと計り、攻守地を換えて逆さ寄せを試みられたり」「海老名氏は此の逆さ寄せに逢ひて周章狼狽せる者の如く」

「カルビン、ルーテル、ウエスレー、モウリス、等を始めとして、基督の教会が異口同音に主張する所を主張したるにて一宗一派の信仰に非るなり。剰さへ基督は礼拝を受け、祈りを受け、此の上も無き敬愛を受くべき神のひとり子なりと言ひたれば、既に或る人々の如く、漠然として基督を神の顕影なりとするに非ず。」「余輩の操持する信仰の内容は、一とわたり此に分明なるべしと信ず。」「氏は余輩が信仰の内容を解釈し説明するの労を執らざるが故に止むを得ず退却せりと言はるるか。」

「道の為めには退却するものをも追跡して之を攻撃せざるべからず。余輩は重ねて左の問を以て氏に迫らんと欲す。」「海老名氏は神を父なりと信ぜらる。其の内容如何。神は永遠無始に父なりしか。」「公開書を発して挑戦者の地位に立たれたる氏は、之に答ふるの義務無きか。余輩は福音新報の読者諸氏と共に、氏の答弁に接せんことを待ち望むものなり。」

### (3)論争2

5. 海老名弾正「再ひ福音新報記者に與ふ」(1901.12.1 『新人』第二巻第五号)

「福音新報」にて、「「挑戦者の退却」と題し、敵手の背後より口さがなくののしり叫ぶものは植村氏であろう。」「植村氏はまたも其署名なき故をもつて、分けて今回は第三者の地位に立てるを以て、其起草者は断じて正久でないと言ひ張らるるであろうが。」

「足下は足下の「神人となり世に降り」といふ信仰表白に対する吾人の質問に向つては、何故に一片の答弁をも試みられなかったのであるか。」「足下の言はる此表白の意義は明々白々で別に六ケ敷ところはない、説明を要することはないと。しかも足下の表白には独り教外に反対者の多いのみならず、教内にも異説紛々として決する所がないのは足下の篤と承知せらるる所であるう。」

「父なる神の外に子なる一柱の神ありと主張せらるる」「足下は二神教の主張者であるように考へらるる」「神父と神子との哲学的関係は未だ詳に聞くをえなかったが」「足下は所謂正統派の主張者を以て自任せらるるようであるから、聖霊も亦父子の二神に並立して吾人の崇敬をうくべき一の神たることも承認せらるるであるう」、「三神教の主張者たるかやうに思はるるのである。」「然るを二者の中間に第三者の聖霊を必要とする如きは如何なる理由であるか」「第四者即ち神の母を並へ礼拝するに至つたのである」

「新報記者は何を以て古代の哲学思想の産み出せるかかる神話的教説を承認せらるるのであるか。」「はたカルビン、ルーテル、ウエスレー等の諸賢が信仰したからといつて、之に盲従和同せらるるのであろうか。記者はか〈信ずるのを歴史的継承とせられるやうだ。史的継承は吾人も大に重んずる所であるけれども、古代の形骸を其儘に伝ふるのは抑も歴史を滅却したものではないか。歴史といふことは文字其物よりして開展進化を意味して居る。」「吾人は基督の神性をも信じ、聖霊の神性をも信じ、又三位一体論の教義中に深遠なる宗教的真理の包蔵せらるるを信ずる。しかし植村氏の神話的教説の如きは、基督教本義の光明を蔽塞するが故に、断じて之を排撃しようと欲する。吾人は活ける歴史を信ずるが故に死せる形骸は死者をして之を葬らしめんことを欲する。」

### 6. 植村正久「海老名弾正氏の説を読む」(1901.12.11『福音新報』337号)

「余輩の問ひしは此に在らず。基督は神なるか非かを問ひしなり基督は祈りを受くべきものなりや。」「ゆにてりあんも聖霊の神性を信ずべし。余輩は聖霊のペルソナ的なるや否を知らま欲しく思ふのみ。三一説はヘエゲルも深遠なりと認めたり。然れども彼は基督教徒に非るなり。」「余輩は氏の三一主義の如何なるやを知らんと欲するなり。」

# (4)海老名弾正の三位一体論

海老名弾正「三位一体の教義と予が宗教的意識」(1902.1.1 『新人』第二巻第六号) 植村正久「基督と其の事業」(1902.1.29-7.24 『福音新報』)

### (5)論争とその波及

7. 福音新報社説「海老名弾正氏の告白を紹介す」(1902.1.8 『福音新報』341号)

「所謂化身論、三位一体説等の史由来を説き、其の進化的順序を叙べんと企てたり。其の希望は以て此等諸説の全〈時代的にして、永久の真理に非るを証せんと欲するに在り。」

「初代基督教徒の信仰が当時のロゴス説に由来すと做すは一個の臆断に過ぎず。」「当時の基督教徒は思弁的に研究して、神と人とを結び付くる基督を先づロゴスとし、次ぎに之を以て神

其ものとし終に化身説を案出せりとは何分も余輩の合点し難きところなり。」「先つ基督に祈り且つ神事したるよりロゴス論も化身説も其の自然の結果として発生しき来れるに非ずや」「進化論者の迷妄を連想せざるを得ず。」

「基督の言を適当に解釈すれば、之を神と見る外なきもの甚だ多し。」「当時の信徒のみに非ず、世々の基督教徒の実験するところ斯〈の如し。」

「其の発見せる基督は如何なるものや」

「神と本体を同ふすと云ひ、形而上的父子有親の関係ありと唱へ、或ひは人に対して神なりと説くの意義果して如何ん。余輩の此の点に於て新人記者が思想の脈絡不明了にして、前後の照応甚だ漠然たるを憾みとす。」

「基督の神性を認むと称して、其の実神と人とを全〈同一なるものと做す。」「海老名氏の基督論は其の第三種に属す。其の弊や万有神教に陥り、識らず識らずして罪を無視して、仏教的の信念を抱〈ものとなる。」

「基督教徒の普通意識に交はりを絶つなり。海老名氏が基督現在の地位につきて如何なる信念を有せらるるを知らず。」「漠然基督の神性を呼号するものあらば、余輩は其の万有神教の徒ならんを恐る。」

「新人記者は基督に由りて光明の與へらるる、即はち性質を教へらるるを喜ぶ。余輩此の喜び益深からんことを祈る。然れども其の告白を熟読するに罪悪に関する観念情緒余りに著明ならず。 罪の救ひを基督に見出せるを感謝するの信仰を示せるものあるを見ず。」

「海老名弾正は宗教的な人なり。二十有余年一日の如〈基督教の伝道に従事せらる。其の霊的なるや所謂多〈の正統的基督教者の右に出づべし。余輩は海老名氏の信仰其の教理より善良ならんを望む。否然〈信ずるの理由無きに非るを感謝す。然れども凡ての人は海老名氏の如〈思想して海老名氏の如〈霊的なること能わざるなり。」

### 8. 福音新報社説「彼我相違の点を明らかにす」(1902.1.15『福音新報』342号)

「之を要するに海老名弾正氏は其の明言せらるるほどに基督を中心と做す者に非ず。」

「然れども詮じ来れば、其の実氏は基督を先達の人と崇め、比類なき一個の先輩と見做すに満足せらるるに似たり。」「彼は先覚なり。是は後覚なり。」「彼の基督は一大師表のみ。」「其の祭司たるに至りては海老名氏の告白に其の痕跡だも認むべからざるなり。」「其の基督は神の顕影者なり。然れども世の罪を負ふて、之を贖へる救主に非るなり。」

「覚束なくも万有神教的に基督の神性を認る者が基督に由りて神の愛を識ると、其の間非常な懸隔せる所なくんば非ざるべし。基督の神格を是認せざれば、神の衷情を見るに於て、確かなること能はざるべき。」「新人記者が精確なる基督論なくして漫然基督に於て神の衷情を見るべきと称動するや其の言甚だ富めるに似たれども、其の内容頗る貧なりと謂はざるを得ず。」

「海老名氏の聖霊論を子細に吟味すれば、基督教徒は今日に於て直接に基督と自らとの間に活ける交通と契合とを維持すること能はざるなり。基督を礼拝すること能はず、また之に祈りを為すべからずと説かるる一つの理由は、神格の証拠なる基督の遍在内住を否拒し、従つて其の直接交通を無視し、神秘的契合の有り得べきを疑ふに在りと思はるる。」「其の適当なる意味に於て基督の復活を信ぜざる新人記者」

「日本魂の如くなる基督魂てふ遺風余響のみ伝はりて世を刺激し社会を感化しつつあるを信ぜざる」「基督の道は決して其の如きものに非るなり。」「海老名氏は時代精神に重きを置る。」

「余輩は基督教の歴史的発展を認むるといへども、其の信仰は天より出でたりと確信す。余輩は時代精神よりも神の作用に重〈を置〈。」「海老名氏は基督に学ぶを重んぜらるる。余輩は生死ともに之を信じ、之と結び、之に依り、之に一任するを尚ぶ。」

9. 新人社説「福音新報の紹介文を読む」(1902.2.1 『新人』第二巻第七号)

「公平なる紹介にあらずして、むしろ一種の偏見に以てせる一箇の批判文なるを発見す。しかして其紹介せられし所、間々原文の意を誤り伝へ、時に或は全〈正反対に出つることあり。」

「此意見を有する著名の学者は決して一人にあらず。」 ハルナック、ヴァイスら

「基教徒の信仰が、ロゴス説に由来すとは、誰あつてか之を信ぜん、クリスャンの信仰はキリストを信ずるにあり、其のフィロー哲学を信ずるより起りしにあらざるや、固より明けし。されど記者の所謂初代クリスチャンの信仰てふ意をして、基督教徒信仰の教義を意味せしめば、そが当時のフィロー哲学に由来するといふも、決して臆断といふべからず。」「歴山府哲学の影響の痕跡あるや、誰が眼にも歴々として疑ふべからざるなり。」

「記者曰〈、海老名氏のいはるる如〈、当時の基督教徒は、思弁的に研究して、神と人とを結びつけるキリストを先づロゴスとし、次に之を以て神其物となし、終に化身論を案出せりとは、何分にも予輩の合点しがかき所なりと。これは誤れる紹介なり。」

「記者は吾人の説を別に造りかへ、之を攻撃するに、吾人の意見其物を以てせり。予に取つて 豈に意想外にあらずとせんや。」「しかるに新報記者は吾人を撃つに、人類の祖先を畜類に求め て、其宗教道徳を蔑視せんとする、或る進化論の迷妄を連想せざるをえず、とは何の言ぞや」

「記者は之れに対して、何故に其基礎の薄弱なるかを論ぜざるべからず、之を是れ為さずして、ただ薄弱なりとの一言もて鐵案を下されしこそ、極めて薄弱なる駁論にあらざるか。」

「判定せられたり、吾人の信念は万有神教的信念なりと。記者は流石に吾人の信仰を以て、万有神教の信念なりとはいはれざりき。しかも其的とは何ぞ。これ吾人が神人一体を主張する故に、吾人を以て非基督教的なりと言はるるなきか。これについては尚弁すべき所多かれど、今は基督教が実に汎神教的信念なることを一言して措かん。」エペソ書、ヨハネ15章。「キリストを神と一体たる如く、キリスト信者と神と一体たりうることを、断言したまひしものならずや。」「全く神化せられん」

「基督教徒はキリストを信ず、キリストを信ずとは、他なし、其人格其精神に結合するにあり。 即ちこれと同感同情となり、之れを一致融合し、終に彼を以て、我に化し、我を以て彼れに化す るにあり。」「人性に具はる尊栄を喜び、人類の眞なる姿と大なる可能性と、其無限の未来を仰 慕する所以なり」「人性の中に存する神性」

「ああ当今の牧師伝道師、この神髄を忘れ、この遺志を忘れ、徒らに初代基督教が採用せし、哲学の形式を弁護宣伝せんとせば、基督教の生命と真理とは、何れの日か我国に樹立しえん。 吾人は飽〈迄かの信条主義を打破せざるべからず。」

- 10. 三並良「基督に関する論争を読む」(1902.2.1 『新人』第二巻第七号)
  - 三並良「福音新報記者の基督論」(1902.3.1 『新人』第二巻第八号)
- 11. 小崎弘道「海老名弾正氏の三位一体論を読む」

(1902.1.7-2.7 東京毎週新誌』960-963号)

12.アルブレクト「基督教的意識と神に関する三位一体の教義」

(1902.2.21-3.7 『東京毎週新誌』965-967号)

- 13. 高木壬太郎 「海老名弾正氏の三位一体論」(1902.1.18-3.22 『護教』 547-556)
- 14. 海老名弾正「諸批判を読んで再び予が基督観を明にす」

(1902.4.1 『新人』 第二巻第九号)

「批評者の間に互に相撞着したる所あり、又予が意見に対して正反対の見解を下したるなどもあって中々の奇観を呈して居る。」

「福音新報と毎週新誌とは予が宗教観に罪悪の要素が看過せられてあると極論したが、予は 寧ろ彼等に罪悪の本城に切り入つたる実験ありや否やを疑わざるをえない。予が実験によれば 罪悪の根拠は吾人の主我主義に存する。」「記者たちは罪悪てふ文字のなき故に、予が論文中 に罪悪の意識が見えぬと断案を下されたのであろうか。これは極めて浅薄の見解である。予は 罪悪々々と喋々する人々が、其枝葉を刈除することに汲々として、短刀直入其根幹に及ばざる 感あるを見る。」

「アルブレクト教授」。「吾人固より一個の自己意識のみを根拠とはせぬ。是れ予が論文の全部を見ればよ〈分る筈である。吾人は教授が公同教会を云々せらるるを驚かざるを得ない。教授をして宗教改革の当代にあらしめたならば、ルーテルに賛同せずして、定めて公同教会の代表たりしエックやテッゼルなどと握手せられたであろう。」

「聖霊の説明」「社会精神」「元気」。「霊といふ文字すら一時は幽霊を連想したこともある。使用しなれぬ文字を - 其内容も示さずして - 挿入するほどノンセンス、且つアブサードなことはない。」

「吾人は罪悪ある故に基督と同一の意識を有すべからず」。「基督がもし予を全〈罪悪より救ひ出す力な〈、又従つて其高明なる意識を予に頒與することを肯ぜざるなれば、基督最早予の救主ではない」、「吾人若し基督に於て絶対的救済、即ち神子たるの意識を完成すること能はざるならば、吾人は実に信頼すべからざるものを信頼するのである」、「予は決して基督の吾人を欺かざるを信ずる。吾人は基督に於ける吾人の希望が恥辱とならざるを知る。」

#### (6)一つの結末

・日本福音同盟会第十二回大会(1902年4月12日から14日、東京青年会館)

「本同盟が福音主義と認めるものは聖書を以て信仰と、行為の完全なる規範とし、人と其の救ひのために世に降り玉へる主イエスキリストを神と信ずるものを言ふ」の決議案。出席議員165名の中、反対者6名、賛成者118名で、可決。

・「福音同盟会の決議」(1902.4.23 『福音新報』356号)

「日本福音同盟会は斯〈の如〈大多数を以て福音主義を明白に宣言せり。」

# C. 土肥昭夫「海老名弾正と植村正久の神学論争」

(土肥昭夫 『歴史と証言』教文館 2004年、244-250頁)

### 1. 背景

日本福音同盟会と大挙伝道

2.キリスト論という宗教の信仰的根幹にかかわる事柄

(244)

3. 論争: 海老名より

歴史的に継承されたきた信条に固執し、それを盾として問題を解き明かすような植村の考え方に反対

キリスト教の本義は教理信条ではなく、キリストの生命 教理はキリスト者の宗教的意識を説明したものであり、永遠不変ではない

神とキリストの関係を父子有親の関係という自己の宗教的意識から捉える。

キリストには二方面がある、神に対しては人、人に対しては神

(245)

カルケドン信条、「神人なり」とか、キリストを神とする植村の見解には賛成しないキリストのペルソナに関する教義を認めることができなかった

自己の宗教的体験に基づいて分析がなされる。彼は、神の前に自己を罪の塊でしかないという精神的苦闘の中から、自己が父子有親の関係にあるという宗教意識に到達した。その意識は万人に普遍的なものであると考えた。そして、イエス・キリストをこの宗教的意識を究極的に具現し、神との合一に生きた宗教的人格としてとらえた。

人類の至善、その限りにしてイエス・キリストは単なる人間、そして父子有親の関係を究極的に実現したから、キリストは神になる。力動的モナルキア論あるいは養子論に近い。 (246) 彼の神学の方法が儒教的思惟方法によって著し〈限定されていた

上帝(神)即自然の物理は人倫の道理として連続的。自然主義

父子有親を万物の理と考え、これが神、イエス・キリスト、人間を貫く宗教的意識として存在する。したがって、神のキリストにおける歴史的啓示はその独自性を解消し、人間一般の道理として合理化されてしまった。イエス・キリストは神ではなく、万物に遍在する神の理を宿す人間の宗教的意識を明らかにし、神との合一を実現した宗教的人間の極致となった。

日本的な思惟方法でキリスト教神学を構築する場合の問題性

#### 4. 植村正久の反論

海老名の考えでは、キリストと海老名の関係は先輩と後輩の関係に過ぎず、キリストは人間の罪を贖う救主にならない。神の愛は、十字架の贖罪の行為に見られる。キリストの行為は神の行為。キリストが神であることを認めなければ、神の愛を知ることはできない。 (247) 海老名の信仰は、歴史的信仰に反する。

植村正久「基督と其の事業」、キリストの人格とその業を明らかにすることの重要性

(248)

キリスト教信仰の成立根拠は、イエスの神格性、その無罪、超自然的事実としての復活 自由主義神学的なイエス伝研究を極力警戒。その論述は学問的業績というよりも、「建徳 的弁証論の性質を帯びて綴られ」た。当時の日本の教会の状況を考えるならば、その説明は 当を得ている。

#### 儒教に対するキリスト教の有用性

男女の序列関係を唱えたパウロの考えを当然とし、その論理は両者を同類としつ つその従属関係を唱えたオリゲネス派の従属説とあまり変わらないことになってしまう。 (249)

植村は海老名の三位一体論に関する見解を読んで、彼が罪の問題を顕著にとらえていないから、キリストの救いがわからなくなる、と述べた。これに対して、海老名は自己の宗教的体験に基づいて、罪悪の根拠を主我主義とし、これがキリストの十字架によって殺され、主神主義に転換することが、キリストの救いである、反論した。両者の根本的な相違の原因は、彼らの神学の方法に由来する。海老名は自己の宗教的体験を儒教的論理によって理解し、それを基軸として聖書や教義をいわば主観的に解釈した。これに対して、植村は自己の宗教体験を福音主義的伝統の中に溶解し、聖書や教義の名において、いわば客観的に自己の所論を展開していった。

このような方法論の相違のため、両者の論争は結局かみあわず、それぞれが自説を唱えて他を攻撃することに終始してしまったのである。さらに不幸なことは、この論争を背景とした第11回福音同盟大会(1902.4)の決議とその後の動向であった。 (250)

# D.研究文献

- 1. 熊野義孝 『熊野義孝全集第十二巻 日本のキリスト教』 新教出版社 1982年、157-176, 246-250頁
- 2. 大内三郎·海老沢有道
  - 『日本キリスト教史』日本キリスト教団出版局 1970年、341-355頁
- 3. 土肥昭夫 『日本プロテスタント·キリスト教史』新教出版社 1980年、182-183頁 『歴史と証言』教文館 2004年、244-250頁
- 4. 鵜沼裕子 『資料による日本キリスト教史』聖学院大学出版会 1992年、36-39頁
- 5. 佐藤敏夫 『植村正久』新教出版社 1999年、40-51頁
- 6. 武田清子 『植村正久 その思想史的考察』教文館 2001年、16-19頁